CHISAN-KANGAKU-KAI

阿弥陀如来根本陀羅尼の研究
—陀羅尼の類型化から導かれる成立試論—

佐々木大樹

1　はじめに

真言宗では、阿弥陀如来の大咒のことを「阿弥陀如来根本陀羅尼」と呼び、葬儀等の滅罪法要において常用読誦される。この陀羅尼は、他にも天台宗や浄土宗・曹洞宗等、多くの仏教宗派で用いられ、様々な名称で呼ばれてきた。本稿では、この陀羅尼をより広い視点から論じるために、以下、「阿弥陀陀羅尼」という呼称で統一したいと思う。

一般的に阿弥陀陀羅尼は、真言陀羅尼の解説本の中で、断片的に取り上げられることが多く[1]、近年発表された松本[2006]を除き、体系的・網羅的研究は皆無に等しい。

本稿では、梵字悉曇・漢字音写のみならず、従来あまり検討されてこなかったインド・チベット資料にも研究範囲を広げ、陀羅尼の類型化にもとづき成立試論を述べたいと思う。

2　阿弥陀陀羅尼を収める資料

阿弥陀陀羅尼に関する論考の多くは、現行の陀羅尼(十甘露咒等)、およびその典拠とされる不空訳『無量寿如来観行供養儀軌』(大正蔵№930)の研究が主であり、サンスクリット・チベット資料については、ほとんど言及されてこなかった[2]。本稿では、従来の漢訳諸本の研究成果に、筆者が現時点で見出すことができたサンスクリット資料３種、チベット訳資料５種を加えて検討を試みた。

一般的に陀羅尼は、Ⓐ経典に収められたもの(陀羅尼経)と、Ⓑ陀羅尼単体のものと、２種の流布形態が見いだされる[3]。阿弥陀陀羅尼の場合は、特定の経典をもたず、基本的に陀羅尼単体(あるいは多少の因縁や受持法・功徳をともなって)で流布したものであり、その性格や成立過程については不詳な部分が多い。

【サンスクリット資料】

Skt. ❶*Āryyāmitābhanāmadhāraṇī*(聖なる無量光と名づける陀羅尼：東大写本№345)[4]

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

Skt. ❷*Āryyāmitābhanāmadhāraṇī*(聖なる無量光と名づける陀羅尼：東大写本№514)[5]

Skt. ❸Abhayākaragupta: *Āryyoṣṇīṣavijayāsādhana*(聖なる頂尊勝母の成就法)[6]

mālāmantra(華鬘真言)

【チベット訳資料】

Tib. ❹དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་གཙུག་ཏོར་རྣམ་པར་རྒྱལ་བ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས་རྟོག་པ་དང་བཅས་པ

(一切如来の頂尊勝と名づける陀羅尼ならびに儀軌)[7]

དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཚེ་དང་བ་ཏུ་མེད་པ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས (一切如来の無量寿と名づける陀羅尼)

Tib. ❺བཅོམ་ལྡན་འདས་སྣང་བ་མཐའ་ཡས་ཀྱི་གཟུངས་སྔགས (世尊無量光の陀羅尼真言)[8]

Tib. ❻སྣང་བ་མཐའ་ཡས་རྗེས་སུ་དྲན་པ (無量光の随念)[9]

Tib. ❼འཕགས་པ་ཡོན་ཏན་བསྟོད་པ་དཔག་ཏུ་མེད་པ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས (聖なる無量功徳の讃嘆と名づける陀羅尼)[10]

Tib. ❽Grags-pa rgyal-mtshan འཕགས་མ་གཙུག་ཏོར་རྣམ་པར་རྒྱལ་མའི་སྒྲུབ་ཐབས (聖なる頂尊勝母の成就法)[11]

【漢訳資料】

Ch. ①鳩摩羅什訳『阿弥陀経』(大正蔵№366)[12]　無量仏説往生浄土咒

Ch. ②求那跋陀羅訳『抜一切業障根本得生浄土神咒経』(大正蔵№368)[13]

Ch. ③失訳『阿弥陀仏説咒』(大正蔵№369)[14]

Ch. ④阿地瞿多訳『陀羅尼集経』(大正蔵№901)巻二「阿弥陀仏大思惟経説序文」[15]

阿弥陀仏大身咒

Ch. ⑤不空訳『無量寿如来観行供養儀軌』(大正蔵№930)[16]　無量寿如来根本陀羅尼

Ch. ⑥法賢訳『無量功徳陀羅尼経』(大正蔵№934)[17]

Ch. ⑦法天訳『一切如来烏瑟膩沙最勝総持経』(大正蔵№978)[18]

如来無量寿総持法門

Ch. ⑧菩提流志訳『文殊師利法宝蔵陀羅尼経』(大正蔵№1185A)[19]　阿弥陀如来陀羅尼

Ch. ⑨菩提流志訳『文殊師利宝蔵陀羅尼経』(大正蔵№1185B)[20]　阿弥陀如来陀羅尼

Ch. ⑩実叉難陀訳『甘露陀羅尼咒』(大正蔵№1317)[21]

Ch. ⑪智広・慧真編『密咒円因往生集』(大正蔵№1956)[22]　阿弥陀仏根本咒

Ch. ⑫道世編『法苑珠林』(大正蔵№2122)巻六十[23]　阿弥陀咒

Ch. ⑬法照撰『浄土五会念仏誦経観行儀』(大正蔵№2827)巻中[24]　阿弥陀咒

Ch. ⑭菩提流支訳『阿弥陀仏根本秘密神咒経』(卍続蔵)[25]

抜一切業障根本得生極楽浄土神咒

Ch. ⑮行琳編『釈教最上乗秘密蔵陀羅尼集』(房山石経)[26]

⑮-A 西方極楽無量光如来根本陀羅尼　／　⑮-B 無量光如来陀羅尼

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

3　阿弥陀陀羅尼の類型化

全24種の陀羅尼を列記したが、一口に「阿弥陀陀羅尼」といっても、長短等、様々なタイプのものが併存している。本稿において、これらの阿弥陀陀羅尼を仔細に比較検討したところ、I～V類に類型化することができた。

以下、まず各類型の基本形を示し、その後に各資料中の阿弥陀陀羅尼の本文を配することとした。各陀羅尼の本文のうち、基本形と比べて、語句が欠落する箇所には「***」を挿入し、不規則な相異がある箇所には、下線＿＿＿を付した。また相互の陀羅尼が比較しやすいように、陀羅尼本文をⒶ帰命句、Ⓑ甘露句[27]、Ⓒ祈願・成就句の3つに区分し、さらに想定されるサンスクリット語にしたがって適宜、陀羅尼中にスペースを入れた。

[第Ⅰ類]
Ⓐ Namo 'mitābhāya tathāgatāya, Ⓑ tadyathā, amṛtodbhave amṛta-saṃbhave amṛta-vikrānte Ⓒ svāhā.

Ch.⑧菩提流志訳『文殊師利法宝蔵陀羅尼経』(大正蔵№1185A)　阿弥陀如来陀羅尼
Ⓐ曩謨 弭哆婆去野 怛他孽哆野 Ⓑ怛儞也二合他 阿蜜哩都納婆二合吠徴反閉 阿弭哆三去婆去吠亦如前 阿弭哆尾訖嚕二合帝 Ⓒ娑嚩二合賀

Ch.⑨菩提流志訳『文殊師利宝蔵陀羅尼経』(大正蔵№1185B)　阿弥陀如来陀羅尼
Ⓐ南謨 阿上聲弭多去聲婆去聲野 怛他去聲蘖多去聲野 Ⓑ怛儞他去聲 阿弭多去聲那婆上聲吠 阿弭多三婆上聲吠 阿弭多微乞嚕諦 Ⓒ莎訶

Ch.⑮-B 行琳編『釈教最上乗秘密蔵陀羅尼集』(房山石経)　無量光如来陀羅尼
Ⓐ曩謨引 阿上弭跢婆去引也一怛他引蘖跢引也二 Ⓑ怛你也二合他引三 阿蜜嘌二合妠納婆二合吠四 阿蜜嘌二合多三婆去吠五 阿蜜嘌二合多尾訖嚕二合引帝六 Ⓒ娑縛二合引賀引七

この類は、無量光如来への帰命句と、三つの甘露句と、成就句により構成される最も簡略な阿弥陀陀羅尼である。無量光如来の徳性として、amṛta(甘露)から出現したことを説くのみで、以下のIII・IV・V類に見られるような苦悩・罪悪を除くといった祈願句は説かれていない。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

[第Ⅱ類]

Ⓐ Namo 'ryāmitābhāya tathāgatāya, Ⓑ tadyathā, amṛtodbhave amṛta-siddhabhave amṛta-vikrānta-gāmine gagana-kīrti-kare Ⓒ svāhā.

Ch. ①鳩摩羅什訳『阿弥陀経』(大正蔵№366)　無量仏説往生浄土咒

Ⓐ南無 阿彌多婆夜 哆他伽哆夜 Ⓑ哆地夜他 阿彌唎(上聲)都婆毘 阿彌唎哆悉耽婆毘 阿彌唎哆 毘迦蘭哆伽彌膩 伽伽那抳多迦隸 Ⓒ莎婆訶

Ch. ②求那跋陀羅訳『抜一切業障根本得生浄土神咒経』(大正蔵№368)

Ⓐ南無 阿彌多婆夜 哆(多曷切二)他伽哆(都餓切二)夜 Ⓑ哆地(途賣切三)夜他 阿彌利(上聲四)都婆毘(五) 阿彌利哆(六)悉眈婆毘(七) 阿彌利哆(八)毘迦蘭諦(九) 阿彌利哆(十)毘迦蘭哆(十二)伽彌膩(十二) 伽伽那(十三)枳多迦隸(十四) Ⓒ莎婆訶(十五)

Ch. ⑭菩提流支訳『阿弥陀仏根本秘密神咒経』(卍続蔵)

抜一切業障根本得生極楽浄土神咒

Ⓐ南無 阿彌多婆夜 哆(多曷切二)他伽跢(都餓切二)夜 Ⓑ哆地(途賣切三)夜他 阿彌利(上聲四)都婆毘(五) 阿彌利哆(六)悉眈婆毘(七) 阿彌利哆(八)毘迦蘭諦(九) 阿彌利哆(十)毘迦蘭哆(十二)伽彌膩(十二) 伽伽那(十三)枳多迦隸(十四) Ⓒ莎婆訶(十五)

この阿弥陀陀羅尼は、「阿弥陀如来大咒」あるいは「往生咒」の呼称で、禅宗で常用読誦されるものである。三資料の陀羅尼は、音写語に至るまで一致しており、廣川[1984]が指摘するように最も成立が古い①の陀羅尼が、②⑭に転用されたものと考えられる。

この類もⅠ類と同じく三甘露の構成であるが、二つ目の甘露句が「amṛta-siddhabhave」[28]に変わり、三句目も「amṛtavikrānta」の後に「gāmine」が、さらに「gaganakīrtikare」の語句がそれぞれ増広されている。

[第Ⅲ類]

Ⓐ Namo ratna-trayāya (or: namo buddhāya, namo dharmāya, namo saṃghāya), namo 'mitābhāya tathāgatāyārhate samyaksaṃbuddhāya, Ⓑ tadyathā, amṛte amṛtodbhave amṛta-saṃbhave amṛta-vikrānta-gāmini gagana-kīrti-kari sarva-kleśa (or: pāpa)-kṣayaṃ-kari Ⓒ svāhā.

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

Tib. ❺བཅོམ་ལྡན་འདས་སྣང་བ་མཐའ་ཡས་ཀྱི་གཟུངས་སྔགས（世尊無量光の陀羅尼真言）

Ⓐ *** (tib: 世尊如来阿羅漢正等覚である無量光仏に帰命します) Ⓑtadyathā, amite amitodbhave amitasaṃbhave amitavikrāntakāre amitagaganakīrtikare Ⓒsarvakleśakṣayaṃkari svāhā.

Tib. ❻སྣང་བ་མཐའ་ཡས་རྗེས་སུ་དྲན་པ（無量光の随念）

Ⓐ *** (tib: 世尊如来阿羅漢正等覚である無量光仏に帰命します) tadyathā, Ⓑamite amitodbhave amitasaṃbhave amitavikrāntagāminī gaganakīrtikare sarvakleśakṣayaṃkari Ⓒsvāhā.

Tib. ❼འཕགས་པ་ཡོན་ཏན་བསྔགས་པ་དང་ཀུན་ཏུ་རྒྱུ་བའི་གཟུངས（聖なる無量功徳の讃嘆と名づける陀羅尼）

Ⓐ (tib: 三宝に帰命します) Namo ratnatrayāya, namo bhagavate amitabhaya tathāgatāya arhate saṃmyaksaṃbuddhāya, Ⓑtadyathā, oṃ amite amitodbhave amitasaṃbhave amitavikrānte amitagamini gaganakīrtikari Ⓒsarvakleśakṣayaṃkari svāhā.

Ch. ③失訳『阿弥陀仏説咒』(大正蔵№369)　阿弥陀仏説咒

Ⓐ那上謨 菩上陀夜藥下可同反 那謨 駄囉上摩夜 那謨 僧伽夜 那摩上 阿上弭多婆上夜 跢丁下可同反他伽上多夜 阿上囉上訶上抳 三藐三菩上陀夜 Ⓑ跢姪地下也同反他 阿上弭唎上抳 阿上弭唎都婆上鞞菩下繼反 阿上弭唎跢三婆上鞞 阿上弭唎跢鼻菩反弭迦上囉抳伽弭儞 伽上伽上那上稽居反移唎底都反儞迦上喋 Ⓒ婆上囉上皤波跢叉楚反我焔迦喋一切惡業 娑上婆訶

Ch. ④阿地瞿多訳『陀羅尼集経』(大正蔵№901)　阿弥陀仏大身咒

Ⓐ那上音謨 喝囉上音怛那二合跢囉二合夜耶一 那上音謨 阿喋耶二阿彌跢婆去音耶三 跢他揭跢耶四 阿囉訶上音帝五 三藐三菩駄耶六 Ⓑ跢姪他七 阿蜜哩二合抳八 阿蜜哩二合跢三婆去音髀九 阿蜜哩二合都知婆二合髀十 阿蜜哩二合跢毘迦爛去音跢十二伽彌去音泥 伽伽那十二吉哩底羯嚕十二三合 Ⓒ薩婆斯波迦生二合迦喋曳十四 莎去音訶十五

Ch. ⑥法賢訳『無量功徳陀羅尼経』(大正蔵№934)　無量功徳陀羅尼

Ⓐ那謨引 囉怛那二合怛囉二合夜引野一 那莫 阿引哩也二合阿彌多引婆引野二 怛他引誐多引野三 阿囉曷二合帝引 三藐訖三二合沒馱引野四 Ⓑ怛鞞他引五 阿彌帝引六 阿彌覩引訥婆二合味引七 阿彌多三婆味 阿彌多尾訖蘭二引合帝引九 阿彌多尾訖蘭二引合多誐引彌儞十 誐誐那計引哩底二合羯哩引二十 Ⓒ薩哩嚩二合訖梨二合舍十二刹煬羯哩二合曳引 娑嚩二引合賀三引十

Ch. ⑫道世編『法苑珠林』巻六十(大正蔵№2122)　阿弥陀咒

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

Ⓐ那上謨 菩上陀夜藥可反以下同 那上謨 駄上囉上摩上夜上 那上謨 僧伽夜 那上磨上 阿弭多婆上夜 跢丁可反他伽上多夜 阿上囉訶上抵上 三藐三菩上陀夜 Ⓑ跢姪他地也反下同 阿上弭唎抵 阿上弭唎都婆鞞善迷反以下同 阿上弭唎跢三婆上鞞 阿上弭唎跢鼻菩弭反迦上囉抵伽弭儞五伽上伽上那稽居移反唎底都反儞迦上唎六 Ⓒ娑上囉上皤薄可反播波跛叉楚我反焔迦上唎一切惡業盡也 娑婆訶公可反

Ch. ⑬法照撰『浄土五会念仏誦経観行儀』(大正蔵№2827) 阿弥陀咒

Ⓐ那上謨 菩上陀夜藥可反下同 那上謨 駄囉上摩夜 那上謨 僧伽夜 那上摩 阿上弭多婆上夜 跢丁可反下同他伽上多夜 阿上囉訶上抵 三藐三菩上陀夜 Ⓑ跢姪地也反下同他 阿上弭唎上抵 阿上弭唎都婆鞞菩迷反下同 阿弭上唎跢三婆上鞞 阿上弭唎跢鼻菩弭反迦囉抵伽弭儞 伽上伽上那上稽居移反鞞底者反儞迦上嚩 Ⓒ婆上囉上皤波跛叉楚我反焔迦嚩一切惡業盡 娑訶

この類の共通点は、四甘露句あるいは五甘露句より成り、帰命句が大幅に増広、祈願句が付加されるところに特徴があるが、各資料間の異同は著しい。

まず帰命句であるが、チベット訳❺❻を除き、多く三宝帰依の句を説くが、その中でも資料④⑥は三宝(ratnatrayāya)をまとめて、資料③⑫⑬[29]は仏宝(buddhāya)・法宝(dharmāya)・僧宝(saṃghāya)を個別に帰命する内容となっている。また無量光如来への帰命句についても、I・II類と比較して、阿羅漢(arhate)や正等覚者(samyaksaṃbuddhāya)といった形容が増広されている。

次に甘露句は、四甘露が主流であるが、資料❺❼⑥は五甘露となっている。その五甘露の内容はそれぞれ異なり、資料❺はV類と同様、「gaganakīrtikare」を甘露句のひとつに数え、資料❼は四つ目の甘露句を「vikrānte」「gamini」の二つに分割している。資料⑥ではV類に見られる「amṛtavikrānte」の一句が増広されている。

陀羅尼の末尾には、全資料一貫して、苦悩あるいは罪悪の滅除を祈願する句が増広されている。ただし、祈願句については二つの系統があり、資料③④⑫⑬はpāpa(罪悪・悪業)、資料❺❻❼⑥はkleśa(苦悩・煩悩)からの解放を願う内容に分かれている。このうち、pāpaを含む用例は少数であり、同じく祈願句を含むIV類およびV類では、kleśaとするものが主流となっている。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

[第Ⅳ類]

Ⓑ Oṃ amṛte amṛtodbhave amṛta-vikrānte amṛta-gate amṛta-vikrānta-gāmini amṛtāyur-dade gagana-kīrti-kare Ⓒsarva-kleśa-kṣayaṃ-karīye svāhā.

Skt. ❸ *Āryyoṣṇīṣavijayāsādhana*（聖なる頂尊勝母の成就法）mālāmantra（華鬘真言）

Ⓑ Oṃ amite amitodbhave amitacakrānte amitagātre amitagāmini amitāyurdade gaganakīrttikari Ⓒsarvvakleśakṣayaṃkarīye svāhā.

Tib. ❹ དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་གཙུག་ཏོར་རྣམ་པར་རྒྱལ་བ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས་རྟོག་པ་དང་བཅས་པ

（一切如来の頂尊勝と名づける陀羅尼ならびに儀軌）

དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཚེ་དཔག་ཏུ་མེད་པ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས（一切如来の無量寿と名づける陀羅尼）

Ⓑ Oṃ amrite amritodbhave amritavikrānte amritagate amritagāmini amrita・āyurdate gaganakīrtikare Ⓒsarvakleśakṣayaṃkarīye svāhā.

Tib. ❽ འཕགས་མ་གཙུག་ཏོར་རྣམ་པར་རྒྱལ་མའི་སྒྲུབ་ཐབས（聖なる頂尊勝母の成就法）

Ⓑ Oṃ amite amitodbhave ametavikirānte amitagate amitagāmini amitāyurdade gaganakīrttikari Ⓒsarvvakleśakṣayaṃkarīye svāhā.

Ch. ⑦法天訳『一切如来烏瑟膩沙最勝総持経』（大正蔵№978）如来無量寿総持法門

Ⓑ唵引 阿密哩二合帝引 阿密哩二合帝引 阿密哩二合覩捺婆二合吠 阿密哩二合多尾訖嚩二合帝引 *** 阿密哩二合多誐引彌儞去 阿密哩二合多喩哩那二合禰 誐誐曩計哩帝二合羯哩引 Ⓒ薩哩嚩二合吉梨二合引舍叉演羯哩曳引 娑嚩二合引賀

この類は、仏頂尊勝陀羅尼系の資料で継承されてきた特異な六甘露句の陀羅尼である。三宝や無量光如来に対する帰命句は全く欠落し、一貫して「oṃ」から始まり、甘露句には、他に類を見ない「amṛtagate」や「amṛtāyurdade」という句が含まれている。

これらの特徴的要素は、主に陀羅尼を収める資料の性格を反映したものと考えられる。同類中、より古い資料である❹⑦[30]では、「極楽仏刹の教主である無量寿如来（ཚེ་དཔག་ཏུ་མེད་པ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ）が、短命の衆生のために陀羅尼を授ける」という因縁を説いている。このような資料の性格をうけて、陀羅尼の中に「amṛtāyurdade」が加えられ、無量寿（amitāyus）としての徳性を前面に打ち出すために、無量光（amitābha）への帰命句が除かれたものと推測される。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

[第Ⅴ類]

Ⓐ Namo ratna-trayāya, namaḥ āryāmitābhāya tathāgatāyārhate samyaksaṃ-buddhāya, Ⓑ tadyathā, oṃ amṛte amṛtodbhave amṛta-saṃbhave amṛta-garbhe amṛta-siddhe amṛta-teje amṛta-vikrānte amṛta-vikrānta-gāmine amṛta-gagana-kīrti-kare amṛta-dundubhi-svare Ⓒ sarvārtha-sādhane sarva-karma-kleśa-kṣayaṃ-kare svāhā.

Skt. ❶ *Āryyāmitābhanāmadhāraṇī*(聖なる無量光と名づける陀羅尼)

Ⓐ *** Oṃ namo bhagavate amitābhāya tathāgatāyārhate saṃmyaksaṃ-buddhāya, Ⓑ tadyathā, amite amite amitodbhave amitasaṃbhave *** amitasiddhe amitateje amitateje amitavikrāte amitagāmine amitagagaṇa-kīrttikare amitadundubhisvare Ⓒ sarvvārthasādhane sarvvakarmma-kreśakṣayaṃkari svāhā.

Skt. ❷ *Āryyāmitābhanāmadhāraṇī*(聖なる無量光と名づける陀羅尼)

Ⓐ *** Oṃ namo bhagavate amitābhāya tathāgatāyārhate samyaksam-buddhā, Ⓑ tadyathā, amṛte amṛte amitobhava amitasaṃbhava *** amita-siṃddhe amitateje amitateje amitavikrāta amitagāmine amitagagaṇa-kīrttaṃkare amitadundubhisvare Ⓒ sarvvārthasādhane sarvvakarmma-kreśakṣayaṃkari svāhā.

Ch. ⑤不空訳『無量寿如来観行供養儀軌』(大正蔵№930)　無量寿如来根本陀羅尼

Ⓐ曩謨引 囉怛曩二合怛囉二合夜引耶一 曩莫入 阿去哩野二合弭跢婆耶二 怛他引蘖跢引夜引 囉賀引帝引 三去藐三去沒馱引耶三 Ⓑ怛儞也二合他引四 唵引 阿蜜唎二合帝五 阿蜜唎二合妬引納婆二合吠微閉反六 阿蜜唎二合多三去婆吠七 阿上蜜唎二合多蘖陛八 阿上蜜唎二合多悉第九 阿蜜唎二合多帝際自曳反十 阿蜜唎二合多尾訖磷二合帝十一 阿蜜唎二合多尾訖磷二合多誐引弭寧引二十 阿上蜜唎二合多誐誐曩吉底迦嚩十三 阿蜜唎二合多嫩上努批娑嚩二合嚩十四 Ⓒ薩縛引囉他二合娑引馱寧十五 薩縛引羯磨訖禮二合引捨乞灑二合孕迦嶷 娑縛二合賀引

Ch. ⑩実叉難陀訳『甘露陀羅尼咒』(大正蔵№1317)

Ⓐ那謨 皤哦嚩帝一 阿彌哆哆婆耶二 怛他羯哆耶三 阿羅訶帝四 三藐三勃陀耶五 Ⓑ怛儞也他六 唵七 阿彌哩帝八 阿彌哩覩皤吠九 阿彌哩哆參皤吠十 阿彌哩哆羯陛十一 阿彌哩哆徙悌十二 阿彌哩哆帝藝十三 阿彌哩哆尾羯囉帝十四 阿彌

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

哩哆尾迦哆哦彌泥十五 阿彌哩哆伽哦曩十六枳栗底迦隷十七 阿彌哩哆訥努吠十八薩嚩隷十九 ©薩婆怛他二十薩陀彌二十 薩婆枳隷捨羯叉炎迦隷 薩嚩訶二十

Ch. ⑪智広・慧真編『密咒円因往生集』(大正蔵№1956) 阿弥陀仏根本咒

Ⓐ捺麼 囉捺嚩囉二合也引也 捺麻 啊引哈拽二合啊彌怛引末引也 怛達引遏怛引也 啊囉訶二合矴 薩滅三莫嗟引也 Ⓑ怛涅達引 唵 啊密嘌二合矴 啊密嘌二合多納末二合永 啊密嘌二合怛三末永 啊密嘌二合怛遏哈唵二合 啊密嘌二合怛西寧 啊密嘌二合怛矴晴 啊密嘌二合怛覓悔磷盧間切二合引矴 啊密嘌二合怛覓屹磷上同怛遏引彌爾 啊密嘌二合怛遏遏捺雞引哈帝二合葛哈 啊嚕嘌二合怛嫩努覓厮斡二合哈 ©薩哈末二合引合哈達二合薩引嗟爾 薩哈末二合葛哈麻二合屹令二合疙折疙折二合嚫葛哈 莎引訶

Ch. ⑮-A 行琳編『釈教最上乗秘密蔵陀羅尼集』(房山石経)

西方極楽無量光如来根本陀羅尼

Ⓐ曩謨引 喇怛曩二合怛囉二合夜引耶一 曩莫 阿去引哩野二合阿上弭跢引婆去引也 怛他引蘖跢引夜引 囉曷二合帝 三藐三沒馱引也三 Ⓑ怛你也二合他引四 唵引五 阿蜜嘌二合帝六 阿上蜜嘌二合妠納婆二合吠引七 阿上蜜嘌二合多三婆去吠八 阿上蜜嘌二合多蘖陛九 阿上蜜嘌二合多悉第十 阿上蜜嘌二合多帝薺十二 阿上蜜嘌二合多尾訖嚕二合引帝十三 阿上蜜嘌二合多尾訖嚕二合多誐引弭寧去十三 阿上蜜嘌二合多誐誐曩吉引嘌底二合迦嶷十四 阿上蜜嘌二合多嫩上努鼻入娑嚩二合嶷十五 ©薩嚩遏喇他二合娑引馱寧去十六 薩縛羯磨吉礼二合捨乞叉二合孕迦嶷引七十 娑嚩二合引賀引八十

この類は、十甘露あるいは十一甘露より構成される最も長い阿弥陀陀羅尼で、甘露句および祈願句において増広が著しい。同類中でも、資料⑤不空訳『無量寿如来観行供養儀軌』(大正蔵№930)に説かれる陀羅尼は、「阿弥陀如来根本陀羅尼」あるいは「十甘露咒」と呼ばれ、真言宗をはじめ、多くの仏教宗派で常用読誦される。

まず甘露句の内容であるが、漢訳資料⑤⑩⑪⑮では一貫して、他類には見られない「amṛtagarbhe」「amṛtateje」「amṛtadundubhisvare」の句が増広され、「gagaṇakīrtikare」に「amṛta」が付されて十甘露を説く。サンスクリット資料❶❷には、帰命句がなく、基本形に比べて「amṛtagarbhe」が欠落し、代わりに「amite」「amitateje」がくり返され、十一甘露となっている。

これらの甘露句の増広は、無量光如来の徳性をより強調するために加えられたものと推測されるが、これらの語句に込められた意味合いや、思想的ソースにつ

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

いては全く不明である。松本[2006]は、「amṛtadundubhisvare」について、胎蔵曼荼羅に登場する天鼓雷音(divya-dundubhi-megha-nirgoṣa)との関係を指摘するが定かではない。あるいは「dundubhisvare」を仏の説法を象徴する言葉と解するならば、阿弥陀如来は説法の徳を担うとする真言密教の伝統的解釈とも深い関連を示すことになる[31]。

次に祈願句でも、「sarvārthasādhane」の一文が増広され、さらにIII・IV類にみられる祈願句「sarvākleśakṣayaṃkare」に「karma」の一語が追加されており、より陀羅尼のもたらす利益性が強調されている。

甘露句	陀羅尼
amṛte	18/24
amṛtodbhave	24/24
amṛtasaṃbhave	17/24
amṛtagarbhe	4/24
amṛtasiddhe	9/24
amṛtateje	6/24
amṛtavikrānte	18/24
amṛtagate	3/24
amṛtavikrāntagāmine	20/24
amṛtāyurdade	4/24
(amṛta)gaganakīrtikare	21/24
amṛtadundubhisvare	6/24

以上、現存する全24種類の阿弥陀陀羅尼について、I～V類の類型化を試みてきた。この比較・類型化を通じて、阿弥陀陀羅尼の原初形態が朧気ながら見えてくるように思われる。

左表は、全24種の陀羅尼に含まれる甘露句について、その有無をまとめたものである。このうち全ての陀羅尼に共通する甘露句は「amṛtodbhave」であり、「甘露から生じた」という性質が、もっとも原初的概念を伝えているものと考えられる。このような概念は、「乳海攪拌」等の古代インド神話に深く根ざすものと推測されるが実態は不明であり、今後さらに研究されるべき問題と思われる[32]。

この「amṛtodbhave」に次いで、「(amṛta)gaganakīrtikare」「amṛtavikrāntagāmine」が多く用いられており、阿弥陀陀羅尼の原形は、これらの甘露句より成る簡略なものであったと考えられる。現存する資料でいうならば、I類あるいはII類の陀羅尼がこれに近い。そして現存する阿弥陀陀羅尼を概観するかぎり、簡略な原形が成立し、漸次、増広されていったものと考えられる。

しかし、現存する阿弥陀陀羅尼の多様性から導かれる増広過程は複雑であり、インドにおける原形の成立後、早い段階からいくつかの異なるルートで伝承されたと考えざるをえない。あるものは原形に近いすがたで保存され、あるものは独

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

自の増広をくり返して長大化し、長短様々なタイプのものが並行して流布したものと考えられる。

また、阿弥陀陀羅尼が様々に伝承され、増広されゆく中で、鉤語である「甘露句」についても、「amṛta」と「amita」という二つの系統が生まれてきたようである。このような現象は、いわゆる「阿弥陀」の原語問題にも少なからず関係するので、次項に取り上げることとしたい。

4　amṛta と amita

阿弥陀如来は、日本のみならずアジアで広く信仰された仏尊であるが、その名称である「阿弥陀」の原語については学会においても定説を見ない。この原語の問題について、諸学者により文献学的側面、言語学・音韻論的側面から様々な学説が提示されてきた。それらのうち私見の及ぶ範囲で、主要な学説を整理すると次の四点に集約される。

Ⓐ Amṛta(Amṛda)説　　荻原[1908]　岩松[1977][1982]

「阿弥陀」の原語を amṛta(甘露・不死)に由来する俗語 amita、またその訛形である amida の音写語とした。特に amṛta の不死の意味から amitāyus(無量寿)、さらに太陽崇拝との関係から amitābha(無量光)が用いられるようになったと指摘した。岩松[1977]は、言語学的側面から amṛta が俗語化した amṛda と修正した。

Ⓑ Amita 説　　矢吹[1911]　望月[1930]　真野[1975]　色井[1978]

「阿弥陀」の原語を amita(無量)とし、阿弥陀仏の徳性として amitāyus(無量寿)、さらに amitābha(無量光)の語が派生した。このうち amitāyus(無量寿)という徳性が、後世、不死を意味する amṛta と結びついたと指摘した。

Ⓒ Amitāyus・Amitābha 説　　藤田[1970][1979]

「阿弥陀」の原語を amitāyus(無量寿)と amitābha(無量光)と定め、最後のシラブル -āyus や -āyur が略されている可能性等を指摘した。本来、amitāyus(無量寿)と amitābha(無量光)は、別個のグループに属し、この二つを統合するために「阿弥陀」の名称が用いられたと推定した。

Ⓓ Amidāha(amidă)説　　阪本[1994]

「阿弥陀」の原語を Amitābha(無量光)の Gāndhārī 形 Amidāha と想定し、その訛形である amidāa あるいは amidă とした。この nom./acc. sg. である amidāu が Skt 化し、amitāyus(無量寿)と解釈された。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

先行研究では、浄土系経典を中心に、阿弥陀に関する様々な仏典上の用例が提示されてきた。その中でも藤田[1970]では、諸大乗経典、さらには密教経典について、漢訳のみならず梵蔵資料まで網羅的に検討されている。

諸学者のうち、本稿の主題である阿弥陀陀羅尼について言及するのは、荻原[1908]、矢吹[1911]、色井[1978]であった。そこでは、『無量寿如来観行供養儀軌』に説かれる十甘露咒を中心に検討しており、等しく「阿弥陀陀羅尼＝amṛta-」という前提で論じられてきた。

しかし、本稿において阿弥陀陀羅尼について網羅的に検討したところ、前にも述べたように、amṛta- と amita- という二つのタイプが現存するという興味深い事実が出てきた。本稿でとりあげた全 24 種の阿弥陀陀羅尼のうち、amita- タイプと判断される資料を抜きだすと、意外なことに 10 種にも上った。

[第Ⅴ類] Skt. ❶*Āryyāmitābhanāmadhāraṇī*(聖なる無量光と名づける陀羅尼)
[第Ⅴ類] Skt. ❷*Āryyāmitābhanāmadhāraṇī*(聖なる無量光と名づける陀羅尼)
[第Ⅳ類] Skt. ❸*Āryyoṣṇīṣavijayāsādhana*(聖なる頂尊勝母の成就法)
[第Ⅲ類] Tib. ❺བཅོམ་ལྡན་འདས་སྣང་བ་མཐའ་ཡས་ཀྱི་གཟུངས་སྔགས(世尊無量光の陀羅尼真言)
[第Ⅲ類] Tib. ❻སྣང་བ་མཐའ་ཡས་རྗེས་སུ་དྲན་པ(無量光の随念)
[第Ⅲ類] Tib. ❼འཕགས་པ་ཡོན་ཏན་བསྔགས་པ་དཔག་ཏུ་མེད་པ་ཞེས་བྱ་བའི་གཟུངས
(聖なる無量功徳の讃嘆と名づける陀羅尼)
[第Ⅳ類] Tib. ❽འཕགས་མ་གཙུག་ཏོར་རྣམ་པར་རྒྱལ་མའི་སྒྲུབ་ཐབས(聖なる頂尊勝母の成就法)
[第Ⅲ類] Ch. ⑥法賢訳『無量功徳陀羅尼経』(無量功徳陀羅尼)
[第Ⅰ類] Ch. ⑧菩提流志訳『文殊師利法宝蔵陀羅尼経』(阿弥陀如来陀羅尼)
[第Ⅰ類] Ch. ⑨菩提流志訳『文殊師利宝蔵陀羅尼経』(阿弥陀如来陀羅尼)

本稿でとりあげた阿弥陀陀羅尼のうち、サンスクリット資料の全て、チベット資料の多くが、amita- タイプであった。漢訳音写の阿弥陀陀羅尼については、その原語の特定が困難であるが、帰命句に使われた無量光如来の音写語から[33]、少なくとも資料⑥「阿彌多-」、資料⑧「阿弭哆-」[34]、資料⑨「阿弭多-」⑨の原語は、それぞれ amita- であると判断された。

藤田[1970]や岩松[1977]では、言語学的に amṛta- が amita- に転訛する可能性を否定したが、検討の結果、阿弥陀陀羅尼では、amṛta- と amita- との深い関わりが

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

確認された。岩松[1982]によれば、このような事例は稀であるが、他にも『現在賢劫千仏名経』において、amita- と amṛta- の相互転換が認められるという。

この阿弥陀陀羅尼の中に amṛta- と amita- が並存する事実からは、いかなることが導かれるだろうか。

阿弥陀に関する資料を概観するかぎり、阿弥陀陀羅尼は比較的後代に成立した資料と考えられ、「阿弥陀」の原語問題に直結させることは難しい。しかし、阿弥陀陀羅尼自体の成立問題に関しては、いくつかの重要な知見を得ることができる。

まず amṛta- と amita- という二つのタイプについて、それぞれ別個に成立したとは考えがたく、いずれかがより古いタイプと目される。その前後関係を確定することは難しいが、それぞれの陀羅尼をおさめる資料年代を比較するかぎり、amṛta- タイプが先にあり、後に amita-タイプに転訛した蓋然性が高い。しかも、amṛta- と amita- の陀羅尼が、I・III・IV・V の諸類に混在する事実を勘案するならば、その転訛は、インドにおいて成立後、比較的早い段階で起こった現象と考えられる。そして、このような amita- への転訛は、偶発的な現象ではなく、阿弥陀如来、すなわち Amitāyus・Amitābha が意識されてのものであったと推測される。

先行研究によれば、amṛta- と「阿弥陀」の結びつきを示す用例は、言語的な転訛の可能性は別として、実際の資料中では稀であり、阿弥陀陀羅尼を除けば皆無に等しいという。この点に注目した矢吹[1911]、望月[1930]等は、「阿弥陀」と amṛta- は本来別のものと考え、後代、特に amitāyus(無量寿)という側面から、amṛta に結びついた可能性を指摘している。

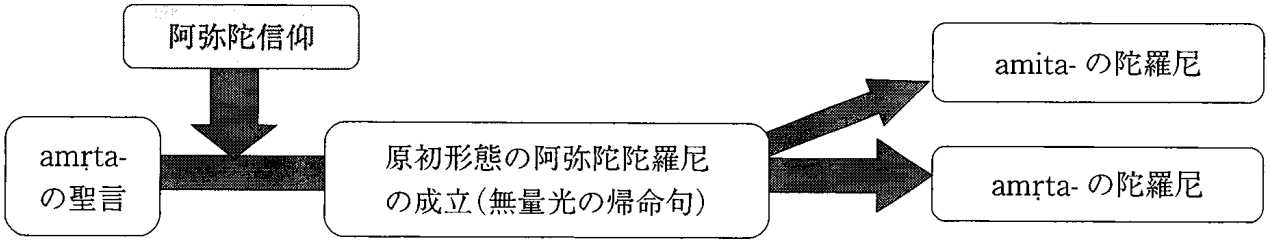
筆者も、この説に同調するものであり、本来独立してあった amṛta- の聖言が先にあり、後世、阿弥陀信仰の伸展をうけて、「阿弥陀―」の陀羅尼に変更されたものと考えている。すなわち、amitābha(無量光)への帰命句が冒頭に付加されたことにより、はじめて「阿弥陀陀羅尼」の原形が成立したのである。このことは同時に「甘露尊」「甘露王」としての阿弥陀如来の成立を意味し、後には甘露壺を手にする阿弥陀へと展開したものと推測される。

その後、amṛta- タイプの阿弥陀陀羅尼は、amitāyus・amitābha という阿弥陀如来の徳性をより色濃く反映して、amita- タイプの阿弥陀陀羅尼が登場してきたものと考えられる。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

最後に阿弥陀陀羅尼に関する成立図を示すと以下のように整理される。



5 小　結

本稿では、従来あまり検討されなかったサンスクリット・チベット資料を含め、全24種の阿弥陀陀羅尼の類型化を行い、阿弥陀陀羅尼の成立に関する重要な知見を得ることができた。

先行研究によれば、阿弥陀如来とamṛtaとを結びつける用例は稀であり、阿弥陀に関する多くの資料の中で、阿弥陀陀羅尼は特異な資料とされてきた。このような視点に立つならば、本来、amṛtaの甘露句は、阿弥陀如来とは関係なく、独立した聖言として存在した蓋然性が高い。そして、このamṛtaの聖言は、「amṛtodbhave」などの数句から成る簡単なものであったと想定される。

このamṛtaの聖言は、後代(5世紀頃か)、阿弥陀信仰と結びつき、無量光の帰命句が冠され、「阿弥陀陀羅尼」の原形が成立したものと考えられる。さらに、amṛta-タイプの阿弥陀陀羅尼は、阿弥陀如来の徳性amitāyus・amitābhaを反映して転訛し、amita-をくり返す陀羅尼が登場してきたと推測される。

参考資料

荻原[1908]：荻原雲來「微瑟紐(Viṣṇu)と阿弥陀」(1908年：『新仏教』9：『荻原雲來文集』荻原博士記念会、pp. 221～230)

矢吹[1911]：矢吹慶輝『阿彌陀仏の研究』(1911年：丙午出版社、pp. 1～16)

望月[1930]：望月信亨『浄土教の起源及発達』(1930年：共立社、pp. 450～463)

田久保[1960]：田久保周誉『真言陀羅尼蔵の解説』(1960年：豊山教育財団、pp. 35～36, 111)

藤田[1970]：藤田宏達『原始浄土思想の研究』(1970年：岩波書店、pp. 287～335)

真野[1975]：真野龍海「浄土教経典の文献学的研究—阿弥陀、称名について—」(1975年：『仏教文化研究』21、pp. 1～15)

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

岩松[1977]：岩松浅夫「阿弥陀仏の原語について―『大阿弥陀経』の音写漢字から見た「阿弥陀の原語考」―」(1977年：『仏教学』4、pp. 25～49)
色井[1978]：色井秀譲『浄土念仏源流考』(1978年：百華苑、pp. 64～72)
藤田[1979]：藤田宏達「再び阿弥陀仏の原語について」(1979年：『仏教学』7、pp. 19～45)
岩松[1982]：岩松浅夫「「無量」と「甘露」」(1982年：『仏教教理の研究　田村芳朗博士還暦記念論集』、pp. 183～193)
廣川[1984]：廣川堯敏「四　浄土三部経」(1984年：牧田諦亮・福井文雅『講座敦煌7 敦煌と中国仏教』大東出版社、pp. 81～114)
阪本[1994]：阪本(後藤)純子「Sukhāvatīvyūha」の韻律と言語：歎仏偈・重誓偈」(1994年：『印度學佛教學研究』42-2、pp. 148～153)
松本[2006]：松本照敬「「阿弥陀如来根本陀羅尼」考」(2006年：『成田山仏教研究所紀要』29、pp. 1～24)
中御門[2008]：中御門敬教「阿弥陀仏儀軌書における往生観の受容と統合―『無量寿如来観行供養儀軌』を事例として―」(2008年：『仏教文化研究』52、pp. 51～72)

註

1) 栂尾祥雲『常用諸経典和解』(1914年：六大新報社)
坂田光全『真言宗常用経典解説』(1948年：高野山出版社)
田久保周誉『真言陀羅尼蔵の解説』(1960年：豊山教育財団)
智山教化研究所『常用陀羅尼と諸真言』(1970年：真言宗智山派宗務所)
真言宗豊山派宗務所『真言宗諸経要集解説』(1980年：真言宗豊山派宗務所)
種智院大学密教学会『梵字大鑑』(1983年：名著普及会)
八田幸雄『真言事典』(1985年：平川出版社)
有賀要延『ダラニ大辞典』(1992年：国書刊行会)
坂田光全『真言宗　常用経典講義』(1997年：東方出版)
木村俊彦・竹中智泰『禅宗の陀羅尼』(1998年：大東出版社)
智山教化研究所『《改訂増補版》常用陀羅尼と諸真言』(2000年：真言宗智山派宗務所)
智山伝法院『智山の真言―常用経典における真言の解説―』(2010年：智山伝法院選書15)

2) 註記1)に示した資料の多くは、現行の陀羅尼、および典拠となる儀軌にもとづく解説が主である。田久保[1960]や松本[2006]は、阿弥陀陀羅尼の漢訳諸本を比較するが、やはりサンスクリット・チベット資料については未検討である。

3) 「Ⓐ経典に収められたもの(陀羅尼経)」の典型としては、「一切如来身秘密全身舎利宝篋印陀羅尼」や「仏頂尊勝陀羅尼」等の名を挙げることができる。ただし「仏頂

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

尊勝陀羅尼」は、陀羅尼単体としても広く流通したものであり、Ⓑの側面も兼ねている。

4) HP「東京大学綜合図書館所蔵　南アジア・サンスクリット語　写本データベース」(東京大学東洋文化研究所　http://utlsktms.ioc.u-tokyo.ac.jp/utlsktms/)
書誌詳細：Paper, 13 leaves, 6 lines, 3 3/8×10 1/8 inch., Nepalese character, modern

5) HP「東京大学綜合図書館所蔵　南アジア・サンスクリット語　写本データベース」
書誌詳細：Paper, 59 leaves, 5 lines, 11 7/8×2 3/4 inch., Nepalese character, modern, Fragment. Numbered 85-145.

6) ed. B. Bhattacharya *Sādhanamālā*: №, 211 *Āryyoṣṇīṣavijayāsādhana*(p. 417～418)
Sādhanamālā は、Abhayākaragupta によって 12 世紀中頃に編纂された。

7) Derge(Taipei. ed), Toh. №595, Pha 237b4-242a6
Ch. ⑦法天訳『仏説一切如来烏瑟膩沙最勝総持経』のチベット異訳。

8) Derge(Taipei. ed), Toh. №677, Tengyur, rgyud, Ba 222b1-222b6　Cf. Toh. №864
インド名：*Bhagavān amitābhadhāraṇīmantra*

9) Derge(Taipei. ed), Toh. №678, Tengyur, rgyud, Ba 222b6-223a1
インド名：*Amitābhānusmṛti*　＊中御門[2008]の註記 102)に和訳が記載される。

10) Derge(Taipei. ed), Toh. №679, Tengyur, rgyud, Ba 222b6-223a1　Cf. Toh. №851
インド名：*Āryāparimitaguṇānuśaṃsādhāraṇī*　＊中御門[2008]の註記 102)に和訳が記載される。

11) Derge(Taipei. ed), Toh. №3601, Tengyur, rgyud, mu 226b1-227a7
Sādhanamālā 所収の Skt. ❸*Āryyoṣṇīṣavijayāsādhana* のチベット訳。

12) 『大正蔵経』vol. 12, №366, pp. 346b-348b 弘始四年(402)年の漢訳。

13) 『大正蔵経』vol. 12, №368, pp. 351c-352a
廣川[1984]は、元嘉三十年(453)漢訳ではなく宋代成立と推定。

14) 『大正蔵経』vol. 12, №369, pp. 352a-352b 年代不詳。

15) 『大正蔵経』vol. 18, №901, pp. 800a-802c 永徽四年(653)の漢訳。

16) 『大正蔵経』vol. 19, №930, pp. 67b-72b 開元二十八年(740)～大暦六年(771)の漢訳。

17) 『大正蔵経』vol. 19, №934, pp. 80a-b 開宝六年(973)～咸平四年(1001)の漢訳。

18) 『大正蔵経』vol. 19, №978, pp. 407b-409c
開宝六年(973)～咸平四年(1001)の漢訳。Tib❹の漢訳。

19) 『大正蔵経』vol. 20, №1185A, pp. 791b-797c
景龍四年(710)の漢訳とされるが、内容的に中国撰述の可能性あり。

20) 『大正蔵経』vol. 20, №1185B, pp. 798a-807b 別名「文殊師利菩薩八字三昧法」。

21) 『大正蔵経』vol. 21, №1317, p. 468c 廣川[1984]では 695～704 年の漢訳と記載。

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

22) 『大正蔵経』vol. 46, №1956, pp. 1007b-1013b 天慶七年(1199)の成立。

23) 『大正蔵経』vol. 53, №2122, pp. 735b-736b(呪術編第六十八・阿弥陀部第三)
総章元年(668)の成立。

24) 『大正蔵経』vol. 85, №2827, pp. 1242c-1244b(仏説阿弥陀経)総章元年(668)の成立。

25) 『卍続蔵経』vol. 3, pp. 414a-416a
廣川[1984]は、菩提流支(508 年頃)訳ではなく、宋代 1173 年以降成立と推定。

26) 『房山明呪集』vol. 1, pp. 186-189
『釈教最上乗秘密蔵陀羅尼集』全 30 巻は、唐照宗(867～904：在位 888～904)の治世、光化元年(898)に三蔵沙門行琳によって編纂・完成された。同書には、二種の阿弥陀陀羅尼が収載されており、皇統七年(1147)までに房山に石刻されたと伝える。

27) 第 4 項「amṛta と amita」で取り上げるように、阿弥陀陀羅尼には「amṛta」(甘露)ではなく、「amita」(無量)をくり返すタイプも存在するが、本稿では便宜上、「甘露句」という呼称で統一した。

28) この「amṛtasiddhabhave」に類似する甘露句として、V 類の「amṛtasiddhe」がある。

29) 資料③⑫⑬の音写語はほぼ一致しており、③の陀羅尼が「阿弥陀呪」として後世、『法苑珠林』(大正蔵№934)や『浄土五会念仏誦経観行儀』(大正蔵№2122)に取りこまれたものと推測される。

30) 拙論「「仏頂尊勝母成就法」の研究」(2010 年：『智山学報』59)参照。

31) 真言密教では、阿弥陀如来(＝無量寿如来・観自在王如来)について、智慧や灌頂とともに転法輪・説法の徳を司る尊と位置づけてきたが、これは主に金剛頂系の密教に由来するものと考えられる。例えば、金剛界曼荼羅の典拠のひとつである『真実摂経』では、阿弥陀如来の四親近として、金剛法(vajradharma)・金剛利(vajra-tīkṣna)・金剛因(vajrahetu)・金剛語(vajrabhāṣa)を挙げており、転法輪・説法との深い関わりを示す。不空訳『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』では、「観自在王の加持に由り、語輪よく無量修多羅法門を説く」(『大正蔵経』vol. 18, №870, p. 291a)とも記される。阿弥陀と説法の関係については文献上、さらに遡ることが可能であり、654 年訳出の阿地瞿多訳『陀羅尼集経』巻二「阿弥陀仏大思惟経」では、説法印を結ぶ阿弥陀という特殊な図様が説かれる(『大正蔵経』vol. 18, №901, pp. 800c)。

32) 智山教化研究所『《改訂増補版》常用陀羅尼と諸真言』(p. 24)では、甘露句について、インド神話と結びつけ、「『リグ・ヴェーダ聖典』の神話では、甘露はそれを飲めば不死が得られるバラモンの飲料ソーマ(soma)酒のことであった。ここでは永遠の生命を持つ無量光如来を指す」と解説している。同解説本ではまた、「tejas」を光、

NII-Electronic Library Service

CHISAN-KANGAKU-KAI

「vikrāntagāmin」を太陽の運行、「dundubhisvara」を雷音として、自然現象との関係を指摘している。

また智山伝法院『智山の真言—常用経典における真言の解説—』では、特に「amṛtavikrānte」「amṛtavikrāntagāmine」という歩行に関わる甘露句について、Viṣṇu 神が世界を三歩で踏破したという神話に由来する可能性を指摘している。

33) 無量光如来(amitābhāya tathāgatāya)の音写語について、資料⑥「阿彌多引婆引野二 怛他引誐多引野三」、資料⑧「弭哆婆去野 怛他孽哆野」、資料⑨「阿上聲弭多去聲婆去聲野 怛他去聲蘖多去聲野」となっている。

34) 資料⑧の陀羅尼には、『大正蔵経』および『卍蔵経』(12-4)を見るかぎり、amṛta-と amita- の語句が混在しており、一句目のみ「阿蜜哩都納婆二合吠徹反閉」すなわち amṛta-(甘露)となっている。

〈キーワード〉 阿弥陀如来根本陀羅尼(十甘露咒；阿弥陀陀羅尼)、甘露(amṛta)、amitābha(無量光)、amitāyus(無量寿)、仏頂尊勝陀羅尼

NII-Electronic Library Service